

# 『尚書中候』における殷湯の受命神話について

間 嶋 潤 一

小稿は、『尚書中候』（以下、『中候』と略す）が構想する殷湯の受命神話をとりあげ、とくにそこに装置されている祥瑞の構造を考察せんとするものである。このようなテーマをもうける理由は、つぎのとおりである。

『中候』は歴代の聖王などに顕現したとされる祥瑞をもつばら説く。それもあきつかりのそれではなく、神的言語―啓示と認めらるものである。すなわちこうした啓示を中心据えて、その周辺に天象や草木などの祥瑞を配置した太平・受命の神話を構想するのである。神の意志にみちあふれているのが、『中候』の世界といえるのである。<sup>(1)</sup>

具体的にいおう。太平のそのばあい、宇宙の最高神―昊天上帝が龍・亀を神使として太平王の黄帝・堯・舜、そして周公に太平の啓示をくだすことをめぐって構想されるものである。そして受命のそのばあいは、こうである。

王朝をひらく受命王に、五帝―蒼帝靈威仰・赤帝赤熛怒・黄帝含枢紐・白帝白招拒・黒帝汁光紀のなかの相当するひとつが受命帝<sup>(2)</sup>となつて、龍・亀以外のものを神使としてその啓示をくだすことをめぐって構想されるものである。それには夏禹・殷湯、および周の文王・武王がとりあげられる。<sup>(3)</sup>

このような『中候』の神話構想には、じつは起点があった。文王・武王の受命―周の受命神話と、周公の太平―周の太平神話とである。すなわち、つぎのように考えられるのである。

『中候』はまず、既存の周についての受命・太平説をとらあげる。それらに装置されていた受命・太平の祥瑞に独自の理論を適用し、それにしたがう象徴や隠喩をあたえて、周の受命・太平が受命帝（蒼帝靈威仰）・昊天上帝の神意によって実現されたものであることを主張するのである。そしてこのような周の受命・太平神話を構想したのである。

ち、『中候』は殷湯以上の受命神話、黄帝・堯・舜の太平神話を加上する。周の受命・太平を弁証した理論を援用する象徴性をもつ瑞祥をあらたに作成し、それらの受命・太平を神意に基礎づけるのである。周以外のそれぞれの神話が、ほかの緯書には微しえない『中候』のオリジナルであったのは、このためであったのである。すなわち『中候』がつづる受命・太平神話は、周の受命・太平を神学的に合理づけるためにこそ構想されたものと認めうるのである。<sup>(5)</sup>

小稿は、くわしい考察をまたねばならぬ以上のなかで、受命神話にしぼる第一歩とする。『中候』のそれらが周の受命神話を起点としていたことは、とくに殷湯の受命神話を考察することによってあぶりだしうるのである。すなわちわたしは、殷湯のそれに装置されている複雑な構造をもつ瑞祥に注目するのである。そうした瑞祥を作成せざるをえなかったところに、『中候』がまず以て周のそれに着手したことは示唆されているのである。

なおその考察にさきだって、つぎのことを指摘しておくねばならない。『中候』の佚文は後漢のはじめの文献にもとめうるが、その最終的な成立についてわたしはこう考えている。『中候』は当時の漢王朝が崩壊の兆しをみせていた後漢末において新しい構想のもとに再編集されたもので

あり、それに鄭玄が深くかかわっていた可能性が、つよい。十八篇ある『中候』の篇名もそのときにあたえられ、また現存する『中候』に付されている注についても、鄭玄のそれと基本的には認めてよい、というたちばをとるのである。<sup>(6)</sup>

## 二

さて殷湯の受命神話は、『中候』のなかでも「雒予命」という一篇に構想されている。それは、つぎのように説きおこされるようである。

夏桀、無道にして（臣下の）閔龍逢を殺し、皇凶を絶滅し、歴紀を壊乱す。天下を残賊すれば、賢人は遁逃す。色に淫し慢易して、祖宗に事えず。（夏桀無道、殺閔龍逢、絶滅皇凶、壊乱歴紀。残賊天下、賢人遁逃。淫色慢易、不事祖宗）

〔太平御覽卷八二等引〕<sup>(7)</sup>

受命神話としてはまず、殷湯の受命を可能にする契機からはじめられてしかるべきであろう。右はそうした叙述である。すなわち、夏桀の無道ぶりを強調して天命を失った理由をのべるのである。このようななかでわれわれが注目すべきは、「皇凶を絶滅し、歴紀を壊乱す」のくだりである。これに付されている鄭玄の「皇は天なり。紀は綱紀なり。

天の凶歴、龍逢引きて以て桀を諫むるなり」(皇、天也。紀、綱紀也。天之凶歴、龍逢引以諫桀也)〔太平御覽卷八二引〕という注によると、以下のように解しうる。

「皇図」は「天図」といい、かえりうるものであり、「歴紀」は歴代の綱紀、すなわち宇宙のすぐれて規則たらしい秩序とパラフレイズしうるものである。ただ鄭玄はそれらをまとめて「天の凶歴」とよび、それを引きあいだして関龍逢が夏桀を諫めたという。とすると「天の凶歴」は天子がよるべき模範ととらえうるであろう。ここでわれわれは、『中候』が堯の太平神話のなかで、太平を招来した堯にうけしめる昊天上帝の啓示―「凶書」を想起すべきであろう。

その「凶書」には、昊天上帝の神性をおびた堯によってのみ支配を貫徹しうる、聖なる宇宙の秩序が書きしるされてきた。堯にはそれをかたどる太平国家の構想が課されていたのである。これに対して、夏は太平を招来した王朝とは認められていない。あとでのべるように、ほかの王朝と異にして禪譲によってひらかれるものの、昊天上帝の下位神―五帝のひとつの白帝白招拒を受命帝とし、その神性を源泉に据える神聖王朝であったのである。ただそうした夏が支配を貫徹するとき、その模範となるべき白帝白招拒の啓示が想定されてしかるべきであろう。それが右でいう「皇

図」「歴紀」である。図は啓示一般を指す名称でもあることとから、「皇図」、すなわち天(白帝白招拒)から伝達された図には「歴紀」が書きしるされていたのである。鄭玄が両者をまとめて「天の凶歴」とよんだのは、このためであったのである。要するに右のくだりの主旨は、夏桀がそうしたものにしたがわず、破壊したということである。かくしてここに、白帝白招拒の神聖王朝―夏の天命喪失という宇宙論的事件は合理化しえたのであった。

以上のようにのべる一方で、『中候』は殷湯が受命する伏線をしく。その有徳ぶりを強調する叙述を用意するのである。

天乙(＝湯)、毫に在りしとき、諸の鄰国は襁負して徳に帰す。(天乙在毫、諸鄰国襁負帰徳)〔芸文類聚卷十三等引〕  
殷湯は徳を修めていたので、隣国の人々は子供を背負ってまでかれのもとにやってきた、というのである。

かくしてつぎに、『中候』は殷湯のために顕現する受命の瑞祥を装置しうることになる。

東のかた洛(水)に觀し、堯壇に習礼す。(厚さ)三分の壁を降し、洛水に沈め、退きて立つ。榮光は起こらずして、黄魚、双躍し、出でて壇に躡る。黒鳥、雄を以いて(？)、魚に隨いてまた止まり、化して黒玉と為る。

赤(文)勸ききまれて曰く、玄精の天乙、神福を受けん。桀を伐ちて克ち、三年にして天下悉く合せん、と。(東觀乎洛、習礼堯壇。降三分璧、沈於洛水、退立。榮光不起、黃魚双躍、出躋於壇。黑鳥以雄、随魚亦止、化為黑玉。赤勒曰、玄精天乙、受神福。伐桀克、三年天下悉合)

〔太平御覽卷八三等引〕<sup>(9)</sup>

殷湯は洛水にのぞみ、かつて堯がそのほとりに築いた祭壇で、堯のように祭儀をおこなう。そののち璧玉を洛水に沈める祭儀、すなわち沈璧の礼を、やはり堯のようにおこなう。ところが堯のときと違って、榮光はおこらず、そのかわりに黄魚がおどりでて祭壇にのぼる。やがて黒鳥が飛んできて、黄魚のもとに止まる。するとその黒鳥は黒玉と化してしまふ。それには、殷湯に対する受命の神的言語―啓示が書きしるされていた。

このようなくだりのなかで、われわれが論じねばならない問題は二点ほどある。第一は、殷湯は堯とおなじく沈璧の礼をおこなうが、堯のそのときと異にして榮光がおこらなかつたことである。そして第二は、黄魚と黒鳥とはいかにして殷湯の受命の瑞祥となりうるか、ということである。

まず第一の点である。『中候』における沈璧の礼は、堯、

そして舜の両者がおこないうるものとされている<sup>(10)</sup>。かれらが招来した太平のとき、また禪讓をおこなわんとするとき、それをおこなわせるのである。そして、そうした沈璧の礼のすぐあとには必ず、榮光がひかり輝き、美気が世界にあまねくゆきわたるといった現象をもうける。『中候』のコンテクストにおいてはこのような現象は、啓示を語りかけようとする昊天上帝の神意の表徴ととらえうるものであったのである。『中候』は堯・舜に昊天上帝との神的同理性を措定していたから、昊天上帝から堯・舜への啓示は理論的にも可能であつたわけである。これに対して、あとで指摘するように殷湯には昊天上帝ではなく、五帝のひとつの黒帝汁光紀の神性を措定していた。『中候』は沈璧の礼をおこないうる神的資格を、殷湯にあたえていないのである。にもかかわらず、殷湯が堯をまねて沈璧の礼をおこなうか。それは、最初の王朝・夏のように禪讓ではなく、殷は放伐によってひらかれる王朝であつたからである。このことは、いまますこしの説明が必要であらう。

歴史事実として夏禹は舜から禪讓をうけた。この事実を無視しえない『中候』は、堯から舜への禪讓の際に装置した、堯がおこなう沈璧の礼を舜にもおこなわせる。その禪

讓神話である「考河命」一篇に「堯の行り所の如くす」(如堯所行)〔清河郡本〕とのべ、夏禹への禪讓を命じる啓示を書きしるす「河図」を顕現させるのである。だがしかし『中候』は、そうした禪讓を白帝白招拒を受命帝とする白い金徳の夏禹の受命とは認めない。別にその受命神話を構想するのであるが、夏王朝は禪讓にはじまることにはかわりがないであろう。昊天上帝の神意にそのはじまりは支持されている、といえるのである。そこで『中候』は、夏につづく王朝・殷をひらく殷湯の受命神話を構想するとき、その殷湯に昊天上帝の神意を問う沈璧の礼をおこなわせ、神意の表徴の顕現を想定しないことにした。かくして殷は夏と異にして禪讓ではなく、やがて放伐によってひらかれるはずの黒帝汁光紀の神聖王朝であることが、つよく示唆されることになるのである。

こうしてつぎに、『中候』のコンテキストにおいては殷湯に対する受命の瑞祥が装置される。それがわれわれの第二の問題、すなわち黄魚・黒鳥の顕現である。行論のついでに黒鳥からとりあげよう。

まずその黒はいうまでもなく、五徳終始における水徳の殷湯を象徴する色である。そうした黒鳥が玉と化す。そこには桀を伐って天下を統一せよ、との神的言語が書きしる

されていた。殷湯に対する受命の啓示である。すなわち鄭玄が「黒鳥は、黒帝汁光紀の使いなり」(黒鳥、黒帝汁光紀之使也)〔太平御覽卷八三等引〕と注するように、黒鳥は殷湯の受命帝にほかならぬ黒帝汁光紀が殷湯におくった天啓伝達者であったのである。とすると『中候』がそうした啓示のなかで、殷湯に「玄精」を冠していることには積極的な意味があるはずである。玄は黒のことであるから、「玄精」とは殷湯が黒帝汁光紀の精による感生帝であることを示すのである。われわれはここでも、堯・舜のばあいにかがいった啓示のシステムを確認できる。『中候』は殷湯の感生帝説をその受命神話にリンクすることによって、殷湯とその受命帝―黒帝汁光紀との神的同等性を成立させ、兩者のあいだの言語的交流、すなわち啓示を可能にしたのである。

さてつぎは、黒鳥のまえに顕現したとされている黄魚の問題である。それはなにを象徴しているのであろうか。まず緯書のコンテキストにおいては、魚の象徴性はこうとらえられていたようである。それには手足も翼もないことから、放伐の対象となるものの孤立無援の状況である、と。するとこのばあいの魚は、殷湯の放伐による夏桀の滅亡を象徴している、とまずはいいえよう。またそうした魚に夏

桀を象徴する色を冠すると、殷湯の受命神話における魚の象徴性はいつそうあきらかとなるはずである。だがしかし『中候』は、黄魚を顕現させた。その色は金徳―夏の桀を象徴する白ではないのである。ここには、『中候』のどのような意図が伏在しているのであろうか。

これについての鄭玄の注に、われわれは注目してみよう。それは「魚は足翼なければ、桀、孤にして時に党なく、伐つべきを言うなり。黄は土の色なり。土は水を遏むる所以なり。今、土、湯に帰するは、則ち金助なり」(魚者無足翼、言桀孤時無党、可伐也。黄者、土色。土所以遏水。今土帰湯、則金助矣)〔太平御覽卷八三等引〕<sup>13)</sup>である。

まずその前半、すなわち「魚は足翼なければ、桀、孤にして時に党なく、伐つべきを言うなり」をとりあげよう。黄色を問題とせず、魚の象徴性をそのまま殷湯の受命神話にあてはめる注釈をほどこしているのである。

そしてつづく注の後半において、鄭玄は黄色の象徴性をとりあげて、「黄は土の色なり。土は水を遏むる所以なり。今、土、湯に帰するは、則ち金助なり」とのべる。こうしたなかで、黄色の象徴性から鄭玄が演繹する、もうひとつの魚の象徴性が示唆されているが、それはあとで指摘し、まずは鄭玄の注をパラフレイズしよう。それはこうであ

る。

黄魚の黄色は土の色である。その土は水を止め濁らせる。土は水を制する属性をもつのである。黄魚の顕現が象徴する、このような土が殷湯に帰すること、これが「金助」である、と。鄭玄は水・土・金の関係にもとづいて、殷湯による放伐を弁証しているようであるが、その真意は十分にはくみとりえない。

じつはそれを理解する關鍵は、「金助」―金への援助―にもとめうるのである。鄭玄の注のコンテクストからすると、この「金助」は殷湯に対するものであることは明らかである。これは、殷湯を金徳と認める主張にほかならないであろう。すなわち殷湯は、すでにのべたように五行の相生原理の五徳終始において水徳であったが、その一方で相勝原理のそれにおいては金徳に位置づけられていたのである。そしてこのような五徳終始は、とくに放伐による王朝交替を系統だてるものであった。<sup>14)</sup>黄色に託された象徴性は、いよいよ殷湯による放伐の弁証にかかわるものと認めうるのである。とすると、水を制する土が金徳の殷湯に帰服するといいかえうる鄭玄の注は、放伐の対象となる夏桀の位置、すなわち相勝原理の五徳終始において金徳の一代まえを占める木徳を射程にいれるものとらえねばならな

い。鄭玄はそうした木徳の夏を起点として、それからさかのぼる五徳終始を念頭においていたのである。それはつぎのようである。

土―土徳は夏前一代、水―水徳は夏前二代にそれぞれあたる。すなわち土が水を制するということは、夏前一代による夏前二代の放伐を示しているのである。そして土が殷湯に帰すということは、黄色い土徳の夏前一代が金徳の殷湯に帰服することを示す。とするとこれは、夏前一代につづいて殷がひかれたことをいい、そのあいだにあるはずの木徳の夏を五徳終始から抹殺することを意味する。受命王朝としての資格を夏は失うのである。かくしてこうした夏の桀はいわゆる匹夫にすぎず、殷湯がおこなわんとする放伐は、ここに弁証されたのである。

以上のように鄭玄の注の後半は解きあかしうるのだが、処理しておかねばならない問題がいくつかある。まず右の五徳終始である。相勝原理のそれは、歴史王朝としては夏よりのちの放伐による王朝交替を示し、それより以前の堯・舜などは位置づけえないものであった。それゆえにわれわれは、夏前一代・夏前二代と表記したわけだが、五徳終始が循環する王朝交替理論と認めうる以上、そうした王朝の想定は理論としては成立するはずである。こういった

ことが第一の問題である。

そして第二の問題はこうである。鄭玄の注が右のようであるとすると、土が殷湯に帰したという一点のみが殷湯による放伐を弁証するものであり、黄色の象徴性もこれにつきているのである。にもかかわらず、水と土のかかわりに言及して、夏前一代による夏前二代の放伐を示唆しているのはなぜであろうか。それは、鄭玄が魚の象徴することろをそのようにも解したからである。すなわち魚の象徴性を放伐の対象となるものの孤立無援なる状況と認めることにはかわりがないが、さらにこうもとらえた。魚は水生である。それゆえに水を象徴している、と。鄭玄は魚にみたこのふたつの象徴性をあわせた。すると魚は、水徳の王朝の滅亡を象徴しているということになるのである。すなわち土徳―夏前一代による水徳―夏前二代の放伐である。

このようであるとすると、鄭玄の注の後半はかなり複雑な構造をもつものといえるが、はたしてそれが『中候』の本来の意図した黄魚の象徴性をつきえたものであったろうか。この第三の問題については、こう考えられる。すくなくとも黄色の象徴性についての鄭玄の注は、『中候』のそれをときほぐすものとは認めうる。あとで指摘するように、夏・殷の興亡を相勝原理にしたがって弁証しうる瑞祥

の作成が『中候』には課されていたのである。ただ魚に就いての鄭玄の解釈には疑問の余地がある。夏桀放伐の啓示をうける殷湯の受命神話のなかにそれが装置されているのであるから、たとえ夏の色を冠していなくとも、夏桀の状況を象徴していると解するのがごく自然である。またそのように解してこそ、夏を五徳終始から抹殺する黄色の象徴性と補完的な関係をもちえ、黄魚は殷湯の受命の瑞祥としてふさわしいものとなるのである。

ただ鄭玄も実際にはこのように解釈していたはずである。鄭玄の注の前半を想起しよう。「魚は足翼なければ、桀、孤にして時に党なく、伐つべきを言うなり」は、その色を問題とせず、魚を夏桀滅亡の象徴と認めているのである。ところが注の後半において、魚にかかわる別なる象徴性も示した。それはおそらく、魚の象徴性を水ととらえたとき、たまたま黄色の土と魚のそれとが相勝原理にしたがう関係となっていたからであろう。<sup>(15)</sup>

### 三

それではなにゆえに『中候』は、黒鳥・黄魚というほかの緯書には徴しえない独自の瑞祥を作成したのであろうか。その理由はこういえる。『中候』は既存の周の受命説

にもとづいた周の受命神話をさきに構想し、そのうちそれをモデルとして殷湯の受命神話の構想に着手したからである、と。行論のうえで必要なその受命神話のあらましだけを、いまはのべておこう。

『中候』がもとづいた既存の周の受命説は、文王に顕現した赤雀をその瑞祥とする、先秦以来のそれと、武王に顕現した白魚をその瑞祥とする、『尚書』「太誓」が示すそれとである。ただ『中候』にあつては、赤雀も「太誓」に徴しうるものであつた。これらをあわせて連続するひとつの周の受命神話として構想する。赤雀・白魚を一組となるべき周の受命の瑞祥と認め、それらに独自の理論を適用して象徴や隠喩をあたえるのである。それは以下の三点にまとめうる。

第一点はこうである。赤雀・白魚の色に注目すると、このふたつの瑞祥は相勝原理の五徳終始における赤い火徳―周、白い金徳―殷の色を冠している。『中候』は、放伐による殷・周の興亡の弁証に相勝原理を適用するのである。しかし『中候』はその一方で、相生原理の五徳終始を自己の基本的立場としていた。殷・周を黒い水徳から青い木徳への交替と認めるのである。このようなことが第二点である。そして第三点は、その基本的立場をつらぬくための装

置についてである。『中候』はまず、もともと天啓伝達者でもあった赤雀に、あらたに作成したつぎのような神的言語を伝達させる。その前半に、文王を受命帝―蒼帝靈威仰の精による感生帝とする神的言語をおく。文王を受命帝との神的同等性を指定するのである。そしてその後半に、そうした文王であればこそうけうる殷紂討伐を命じる神的言語、すなわち受命の啓示を示すのである。冠する色に整合性はないが、赤雀を周の受命帝の天啓伝達者とするのである。くわえてたんなる瑞祥にすぎなかった白魚にもその色はおき、天啓伝達者をかねさせる。受命の啓示の武王への切れ目なき連続性を主張するのだが、それには解決しておかねばならない問題があった。文王と異にして感生帝ではない武王に、啓示をくだしうる神的資格をあたえる必要があったのである。そのため装置とするのが、武王への文王の遺言である。そこにおいて、武王には天命の正統なる後継者という神的資格が受命王・文王によって指定されるのである。

以上が周の受命神話のあらましである。すなわち『中候』は殷湯の受命神話を構想するにあたり、夏・殷の興亡を相勝原理にしたがって弁証しうる瑞祥、また殷湯を相生原理の五徳終始において黒い水徳に位置づけうる、天啓伝

達者もかねる瑞祥の作成が課されたのである。ただその作成には制限があった。周のそれがそうであったように、『中候』に許されたその作成のための材料は、鳥と魚だけであったのである。

『中候』はまず、周の受命の啓示にしたがう殷湯のそれを作成したうえで、天啓伝達者を取りあげた。その色と殷の受命帝・黒帝汁光紀とのあいだに整合性をもたせるために、黒鳥を示したのである。『中候』は殷湯を黒い水徳に位置づけることを最優先したわけである。ただ周の赤雀に認めかね、これをこのように解消したために、周の受命神話のようにふたつの瑞祥の色によって夏・殷の興亡を弁証することは不可能となった。かくして『中候』は黄魚を作成した。それは以上に論じたように、変則ではあったが、相勝原理にしたがって夏・殷の興亡を弁証しうる瑞祥であったのである。

注

(1) 『中候』のこのような特異性については、拙稿『尚書中候』における太平神話と太平国家（日本中国学会報 第四五集 日本中国学会 一九九三年）の導入部を参照されたい。

(2) 小稿においてもちいる受命帝というタームを、念のために規定しておく。受命の神的言語―啓示を、王朝をひらく受命王

にくだす五帝の一帝を受命帝とよぶのである。

(3) そうしたなかのいくつかの神話についてはすでに論じている。前掲『尚書中候』における太平神話と太平國家―において黃帝・堯・舜の太平神話をとりあげ、拙稿「禪讓と受命―緯書における夏禹の受命神話―」(中村璋八博士古稀記念東洋学論集 汲古書院 一九九六年)において夏禹の受命神話をとりあげたのである。このような太平・受命神話のほかに、『中候』は禪讓神話を構想する。それはまず、太平のうちにおこなわれる堯から舜への禪讓神話である。これは堯の太平神話のなかに包摂されうるのである。また舜から夏禹への禪讓神話もある。堯・舜の際とおなじように、禪讓を命じる昊天上帝の啓示が装置されているが、その一方で天地崩壊的なくだりもその禪讓神話には挿入されている。『中候』は舜から夏禹への禪讓をそのように構想して、その禪讓を夏禹の受命とは認めない。それは夏禹のために受命神話をあたえねばならなかったからである。以上の詳細については、拙稿「禪讓と太平國家―『尚書中候』における禪讓神話―」(中国文化 漢文学会会報五二号 大塚漢文学会 一九九四年)・前掲「禪讓と受命」を参照されたい。なお本論においても、舜・夏禹の際の禪讓神話についてはすこしふれねばならない。

(4) ここで神話の意味をことわっておく、ある事象を根拠づけ、関連づけるために象徴や隠喩などによって聖性をおびて語られるものを神話とよぶばあいがある。わたしが使う神話はそういう意味である。

(5) 『中候』がこのような意図をもつていたた経緯は、いまはおく。ただその意図と、『中候』にも注をほどこしていた鄭玄の經書解釈学とがほぼかさなることだけは、つぎに指摘しておく。それによってわたしが『中候』をとりあげる理由も示しうるであろう。すなわち、それはこうである。鄭玄の經書解釈の設計図とでもいうべき『六芸論』の佚文に「太平嘉瑞 凶書之出、必龜龍衝負焉。黃帝・堯・舜・周公、是其正也。若禹觀河見長人、皐陶於洛見黑公、湯登堯台、見黑鳥至、武王渡河、白魚躍、文王、赤雀止於戶、秦穆公、白雀集於車、是其変也」(詩文王序疏引)とある。天神の神的言語―啓示の顯現を「正」「変」の両パターンに分類するのである。「正」のそれは『中候』の太平神話を、「変」のそれは『中候』の受命神話を、それぞれ援用するものである。すなわち昊天上帝による太平の啓示の顯現が「正」のそれ、受命帝による受命の顯現が「変」のそれと、基本的には、とらえるのである。こうした『六芸論』の叙述と、『中候』の意図とがかさなる。つまり、こういうことである。鄭玄が經書解釈に志向したもの、それは周公になる周の太平國家である。しかもその太平國家は、昊天上帝の神性を源泉に据えるものとなっている。とすると、周公は昊天上帝の啓示をうけていたとの想定が欠かしえない。それが右で示される、昊天上帝の啓示―「凶書」をうける周公である。そしてそこでは、文王・武王による周の受命も重要であったはずである。かれらの受命によって周はひらかれ、つぎの段階として周公が太平を招来するのである。『六芸論』の両パターンは、そ

うした周の受命・太平を神意の帰結とするために加上された受命・太平の系譜であったのである。すなわち『中候』のコンテクトにしたがって、鄭玄のそのような意図の解明が期待できるのである。なお『六芸論』に示される天啓をうける臯陶・秦の穆公もまた、『中候』にみえる。ただそれらは、『中候』が構想するもうひとつの受命の系譜に位置づけられていた。鄭玄がそうしたものを「変」のパターンに組み入れる理由は、こうである。周にかわる秦王朝の出現を観念の世界において否定し、神意の帰結するところは周であることを補強するためである、と。臯陶―黒公・穆公―白雀の色に、これをうかがいうるのである。こうした鄭玄の意図についても、あらためて論じよう。

- (6) 前掲「禪讓と受命」において、こうしたたちばをとる根拠についてやや具体的に説明している。参照されたい。また注(5)に注目すると、『中候』の内容に通暁していた鄭玄をうかがいうることもいいそえておこう。なお小稿において引用する『中候』の佚文・その注については、安居香山・中村璋八編『重修 緯書集成 卷二(書・中候)』(明德出版社 一九七六年)を第一の資料とするが、皮錫瑞『尚書中候疏証』、あるいは私見によって選別し、改めたところがある。これについてのコメントは、最小限度おこなうことにしよう。また読みくです際、( )で補った箇所もある。

(7) ここでは、あとでとりあげる鄭玄注が付されている『太平御覽』(中華書局 一九六〇年)所引を示した。ただ『太平御

覽』はその出典を『尚書帝命候』としているが、皮錫瑞の校比にしたがって『中候』「雒予命」の佚文と認めることにする。この佚文と文字の異同がすこしある叙述が『開元占経』(卷六)にはあり、その出典は『中候』と明示されてもいるのである。なお安居・中村前掲書は、『太平御覽』所引を『尚書帝命候』に、『開元占経』所引を『中候』に、それぞれ分属させる。

(8) 以下の論述において、『中候』が構想する堯・舜の太平神話・太平国家に言及するところは、前掲『尚書中候』における太平神話と太平国家を参照されたい。

(9) 『宋書』「符瑞志上」に「湯在亳、能修其德。伊摯將心湯命、夢乘船過日月之傍。湯乃東至于洛、觀帝堯之壇、沈璧退立、黃魚双踴、黒鳥隨魚止于壇、化為黒玉。又有黒龜、並赤文成字、言夏桀無道、湯当代之」とあり、『中候』の叙述とその内容をほぼおなじくする。孫穀『古微書』は右の傍点部分を『洛書靈准聽』の佚文とし、黄奭『黃氏佚書考』もこれにしたがう。だがしかし、そのように認めうる積極的な根拠は開示されていない。わたしは、右の沈璧の礼をめぐる叙述は堯・舜のそれとおなじように『中候』を出典とするものと考えている。

(10) このほか『中候』は、周公に太平到来の祭儀として沈璧の礼をおこなわせる。ただ現存する『中候』の佚文には、武王・成王がおこなう沈璧の礼の叙述がある。これらは、鄭玄がかかわったと推測される『中候』のそれとは認めえない。両者を鄭玄が「正」のパターンに分類していないことに注目しよう。「正」のそれは、沈璧の礼をおこなないえたものたちの系譜には

かならないのである。

(11) 『考河命』の主要な部分は、「在位十有四年、奏鐘石笙、未罷而天大雷雨、疾風發屋伐木。桴鼓播地、鍾磬亂行、舞人頓伏、樂正狂走。舜乃擁權持衡而笑曰、明哉、夫天下非一人之天下也。亦見於鐘石笙筦乎。……舜乃設壇於河、如堯所行、至於下稷。容光休至、黃龍負圖。長三十二尺、置於壇畔。赤文綠錯、其文曰、禪於夏后、天下康昌」(漕河郡本)である。なお堯・舜の際の禪讓神話には装置されていない、右の前半にのべられる音楽に生じる異常現象を注(3)で天地崩壊のなくだりといっているのである。

(12) あとでふれるが、既存の周の受命説に、武王に顕現した白魚をその瑞祥とする、『尚書』「太誓」が示すものがある。ただこの白魚の魚の象徴性は不祥なものとは認めえない。魚のそれは、天につらなる聖なる川、黄河の霊ととらえるべきである。不祥とみなすのは、すぐれて緯書的な解釈といえるのである。

(13) ここでは『太平御覽』(中華書局 一九六〇年)所引を示した。ただそれには「黃者、土色」の四字がない。『開元占經』(卷二一〇)所引の「黃、土色。明土帰湯」にしたがって、そのように補った。また『黃氏佚書考』は、鄭玄注の最後を「今土帰湯、則助矣」につくる。「助」の上に「金」の一字を加えるのが、本来の鄭玄注である。皮錫瑞『尚書中候疏証』参照。

(14) 相勝原理の五徳終始は、五徳のなかで別な徳がさきの徳に勝っていくように、興亡する兩王朝の対立抗争を前提とし、前一代に対する現王朝の優位性を強調する系譜といえる。すなわ

ち放伐を支持するものと認めうるのである。

(15) さらに鄭玄に関していうならば、問題がもう一点のこっている。注(5)に引いた『六芸論』を想起しよう。ここでは殷湯の受命の瑞祥として黒鳥のみがあげられており、鄭玄は黄魚を示していないのである。それには理由があった。黒鳥がそうであるように、『六芸論』において示される瑞祥は天啓伝達者の神的作用もかねるものにかぎられており、黄魚にはその資格がなかったのである。ただここでは立ち入らないが、つぎの一点は指摘しておかねばならない。黄魚の顕現は、鄭玄の構想する王朝交替においては殷湯の受命の瑞祥のひとつとして欠かしえなかつたことである。

(16) やがておおよげにする拙稿『尚書中候』における周の受命神話について(香川大学教育学部研究報告 第一部九九号 一九九六年)が、その詳論である。

(17) 紙幅の関係でふれなかつたが、このような瑞祥は受命帝がくだすものとは認めえない。一方の滅亡と一方の興起とを弁証するのだから、それを顕現させる主体は一方の受命帝ではなく、また一方のそれでもない。両者は五帝のなかでは同格であるからである。それは、昊天上帝以外には考えられないのである。すなわちその神意は、受命帝の天啓伝達に深くかわっているのである。とするととくに赤雀・白魚は構造的な象徴性をもつものといえる。『中候』は周の受命神話の結びに示す穀物をふくむ赤鳥に、そうした象徴性を集約するのである。前掲『尚書中候』における周の受命神話について<sup>1)</sup>は、以上のこと

もくわしく論じるものである。

・小稿は平成七年度大塚漢文学会大会における口頭発表の内容に加筆したものである。

(香川大学)